

## 原著〈論文〉

## 保育士はゼロ歳児の〈泣き〉をどうみているか

—インタビュー調査から乳児保育理論の検討へ—

星 三和子\*      塩崎 美穂\*\*  
 勝間田万喜\*\*\*      大川 理香\*\*\*\*

Daycare Practitioners' Beliefs about Babies Crying :  
 Reconsideration of Baby Care Theory through an Interview Research

Miwako Hoshi, Miho Shiozaki, Maki Katsumata and Rika Ohkawa

This study examined the thoughts of daycare center practitioners regarding appropriate reaction to crying babies. Seventy-four daycare teachers participated in this research. First, they watched some videos of babies crying in a daycare situation. Afterwards, they were questioned about the practitioners' reactions in the video scenes. Their opinions were collected during a group discussion and analyzed. The results indicated some common beliefs: "Crying infants should be immediately calmed by adults and should include receptive behaviors such as taking the child in their arms and saying sympathetic words." "Demands communicated by crying should be accepted because crying helps establish an affective bond between baby and practitioner." In addition, historical examination of older beliefs suggested reconsideration of today's infant care.

キーワード：泣き，保育所，乳児，愛着

crying, daycare center, infant, attachment

## 1. 問題の所在

0歳の保育所在籍児数は1998年の3万7,090人から2005年の4万7,736人と漸増している<sup>1)</sup>。これは労働市場の変容に伴う0歳児保育需要の増加，また児童福祉施設最低基準の改正（1998）による保育所における乳児保育の一般化等の反映であろう。しかし同時に待機児童解消のための規制緩和，即ち最低基準の見直しによる定員超過等により，保育が量をこなすことに傾斜し質への配慮に手が回らない状況になっているこ

とも事実である。

こうした状況に鑑み，我々は，乳児保育の質についての諸課題を実証的な研究によって明らかにし，保育環境や保育方法の改善策を提案することを目ざしている。特にベテラン保育者の経験知に多くを頼ってきた0歳児保育については，今後のさらなる需要増加に備え，保育の質を確保する乳児保育理論の構築が急務と考えている。

これまで我々は，十数園の0歳児クラスの一日を通してのビデオ記録の検討を行い，乳児の泣き場面に保育の諸課題が反映されていると考えて，泣きに関する研究を多様な側面から行ってきた<sup>2)</sup>。保育者にとって，乳児の泣きは，無視できない強い力をもち対応の仕方の判断を迫られるだけに，保育活動全体に影響を与える。生後4～5か月までの泣きの多くは生理的な不

\*十文字学園女子大学 発達心理学

\*\*お茶の水女子大学 保育学

\*\*\*うめだ・あけぼの学園発達支援部 保育学（発達障害児支援）

\*\*\*\*東京都新宿区立四谷子ども園 保育学

快状態の表出で、緊急を伝えるサインである。しかし月齢が上がるにつれ、このような泣きは減少し<sup>3)</sup>、要求、拒否、抵抗等社会的意図を伝える泣き加わり増加する<sup>4)</sup>。保育者は声や表情と共に状況や時間等から判断して原因や意図を推測するが、判断が正しかったかを検証するすべもないことも多い。そこで保育者は泣きに解釈を与えそれに添って対応する。つまり泣きへの対応は、泣きについて保育者がもつ考えによって大きく影響され、またその対応によって乳児の泣きそのものが変わっていくこともある<sup>5)</sup>。したがって、保育士のもつ泣きについての考えは0歳児保育の重要な要素の一つであり、保育の質に関わるものであると考える。

そこで本研究では、保育者が乳児の個々の泣きの解釈や対応に際して、「泣きに関するどのような概念や考えを基にしているか」という点に焦点を当て、それが乳児保育で果たしている役割についての理論的な考察を試みる。先に保育士218人に対して行われた質問紙調査<sup>6)</sup>では、0歳児の泣きについて、「泣くのは苦痛や不快の表れなのですぐに対応して泣き止ませるべき」の考えに81%の回答者が同意し、「要求の表現として泣いた時はすぐに要求に応えるべき」には96%、「泣きに応えることは将来の大人との信頼関係の基礎になる」にも94%の回答者が同意するという結果を得た。この著しく一致した答えは保育士の強い信念の表れなのか、あるいは自明のことと考えられているのか。実際にビデオ観察では、泣きの原因を問わず、多くの保育者が10秒以内に駆けつけ抱いて泣き止まそうと対応しており<sup>7)</sup>、保育士自身の記録の分析でも同様の結果が示された<sup>8)</sup>。また調査では、「泣くことは自己主張の訓練として望ましい」に66%が同意しながら、「できるだけ泣かせないような保育をしたい」にも同意が61%と、一見矛盾する結果になった。これは泣きの概念と実践のずれの故だろうか。

これらの結果からは、①「泣くことは悪いことではない」、②「しかし泣きにはすぐ応じて泣

き止ませる」、③「泣き止ませることは子どもと保育者の間の信頼関係に繋がる」という基本的な考えが読み取れる。①については乳児の「ことば」としての泣きに意味を見出す理論<sup>9)</sup>、②については不快を取ることの重要性を指摘する理論<sup>10)</sup>、③については情緒的コミュニケーションを強調する理論<sup>11)</sup>など、これらは乳児保育理論や保育者養成教科書として影響力をもつ言説に支えられていると思われる。本研究ではこれらの考えについて、保育者のより詳細で深い意味を知るとともに、なぜそう考えるのか、どんな保育観がそれを支えているかの背景を検討し、これらが保育者間でどう共有されてきたかを乳児保育の歴史的考察を含め検討することを目的とする。

## II. 方法

### 1. 調査方法

上記の目的のために、具体的な泣き状況から出発して内省的な議論に進む方法をとること、および保育者が自分の保育を客観化し言語化しやすい方法をとることを決めた。このために、Tobinら<sup>12)</sup>の「ビデオを手がかりにした多声的エスノグラフィー」と呼ばれる方法を修正して採用した。Tobinらは、ある国の保育に対する考え方の特質を明らかにするために、保育者・親等のグループに外国および自国の保育映像を見せ、それぞれの映像に対する反応をフォーカス・グループ・インタビュー<sup>注1)</sup>の集団討論の形で得た。特に異文化の映像を、内省を刺激する手がかりとして使用し、自明なあるいは意識化されていない考えを顕在化し言語化する効果があった。集団討論での多様な考えの交換（「多声的会話」）はそれを深めるのに貢献した。またBaudelotら<sup>13)</sup>は日常の保育活動の文化的な特徴を明らかにするために同じ方法を使い、有効であった。本研究は基本的にはこの方法に従った。ただ、筆者の一人が参加した上記Baudelotらの研究過程で、自国の保育映像に対しては良い保育か否かの評価的な目が入り易かった経験があ

り、それは本研究の目的外であるので、外国の映像のみを使うことにした。使用する映像は Baudelot らの研究におけるフランスの保育所の観察記録映像の一部で、筆者の一人がこの研究の研究者たちおよび当該保育所の許可を得て使用するものである。

## 2. 調査対象

調査協力者は埼玉県および東京都内7園（公立1園、私立6園）に勤務する保育士74人（勤務年数1～35年）である。各保育所の一室において集団（4～15人）で実施した。所要時間は各2時間～3時間、調査者は筆者（2～4人）である。

## 3. 調査手続き

調査は3つの部分からなり、続けて行われた。

(1)ビデオ映像の視聴：外国の保育所での6か月～1歳前半の子どもの泣き場面の映像4本（30秒～4分）を順に調査協力者たちに見せた。映像の概要は以下の通りである。

**映像1《長く泣く》**：M（6か月女児）が他児との接触から泣き出す。保育者はおしゃぶりや玩具を渡し、他児のおむつを替えながら声をかける。Mは泣き続けるが他の保育者が来て抱き上げると泣き止む。

**映像2《後追いで泣く》**：保育者はおむつ替えを終えたC（11か月女児）を床に下ろし、別の子を寝かせるため抱くと、Cは泣いて保育者の足にすがる。保育者は「あなたの番じゃないの」とCを床に降ろす。

**映像3《子ども同士の接触で泣く》**：男児3人が密集しS（8か月）に他児の足が絡む。Sはやや遠くの保育者を見て泣く。保育者は声をかけ様子を見てから近づき、絡んだSの足をほどく。Sは笑顔で遊び出す。

**映像4《遊具の取り合いで泣く》**：A（1歳前半男児）の手押し車をB（1歳前半男児）が取り、もみ合う。AがBを押し倒しBが泣く。保育者が来てBを抱いて頭をなでAを叱る。Aはふてくされる。

(2)映像の泣きへの対応行動についての自由記述  
筆記：各映像の終了ごとに、映像をどう思ったか、自分なら同じ場面でどうするかについて、自由記述による短い筆記回答を求めた。これは、対応行動についての調査協力者の考えの情報を得るため、および次のインタビューに向けて調査協力者に考えを意識化しておいてもらうためであった。

(3)フォーカス・グループ・インタビュー：具体的な泣き場面を踏まえつつ、内省を発展させた保育者たちの発言を得るために集団インタビューを行った。調査者は調査協力者に、まず各ビデオ場面についての自由記述の確認とその理由の質問を行い、具体的な場面に即して以下の質問を行い、その過程で調査協力者間の議論を促した。その後一般論としての泣きに関する同様の質問と議論へと進んだ。質問は場面や議論の文脈に応じた形と順序で行った。①対応の原則「保育の中での0歳児の泣きの意味は何か」「泣き止ませるのは基本か」②保育者の感情「泣きに対しどんな気持ちになるか」「泣き止ませた時どんな気持ちになるか」③対応の意味「泣きに応えるのは何のためか」「要求を受け入れるのは大事か、なぜか」④対応の子どもへの影響「子どもにとって大人に泣き止ませてもらった経験は大事か、なぜか」「身体接触で泣き止むと思うか、なぜか」「0歳児が自分で泣きから立ち直る経験は大事か」⑤保育の中の泣きの位置「泣きへの対応が他の保育活動とぶつかるのはどんな時か」「泣き止ませねばというプレッシャーを感じるか」「泣きの要因を予め除くのはよいか、なぜか」⑥泣きと保育者・子どもの関係「泣きを通して子どもとの信頼関係はできるか、なぜか」「泣きの場面以外に子どもとの信頼関係を作るのはどんな場面か、泣きを通じた信頼関係はそれとどう違うか」⑦「泣きへの対応の仕方や考えはどこで身につけたか」。調査者は質問者として、質問、意見の確認、発言の意味の明確化の質問、反論についての質問（「ちょっと違うというご意見の方は？」）、同意についての質問（「他

の先生いかがですか)], 大勢の同意点の確認(「同じですか」)等を行い, かつ議論進行者として, できるだけ多声的に調査協力者間の相互作用を促した。多様な考えを引き出すこと, かつ大勢に同意される考えと個別的な考えを確認共有することに配慮した。

#### 4. 分析方法

分析方法は以下の通りである。

- (1)自由記述調査の分析方法: 「自分なら同じ場面でどう対応するか」への筆記回答から, 泣いている子どもに行うであろう行為に言及した記述で, 泣き止ませることに関連した行為を表現することばを抽出し, 分類した。
- (2)インタビュー調査の分析方法: 調査記録は録音(一部録画)および筆記によった。起こし記録を作成し分析対象とした。発言を以下の観点から整理した。「なぜ泣くのは意味があるのか」「なぜ早く泣き止ませるか」「なぜ大人との関係で泣き止ませるか」「泣きと信頼関係はどう結びついているか」「子どもに泣きを通して何を伝えるか」。できるだけ多様な考えを引き出すために, 大方の同意をみた考えのみならず, 少数の考えも抽出して列挙した。発言の抽出と分類は, 筆者のうちの2名の合意によった。

### III. 結果

#### 1. 映像の中の泣きに対する対応行為に関する自由記述調査回答の結果

各映像の中の泣いている子どもに対する行為に言及した人数を表1に記す。ここでは3点を

検討した。まず, 泣く子には必ず優先的に対応するかという点である。泣いている子と他児の世話の間で保育者がジレンマに置かれる事態(映像1と2)において, 泣いている子に優先的に対応するという記述をした人数, 泣いている子を待たせるといふ人数を数えた。その結果, 映像1については前者が29人後者が14人, 映像2は前者が51人後者が15人であった。また子ども同士の接触の事態(映像3と4)において, 「様子を見守る」「観察する」「泣きたいだけ泣かせる」等すぐ対応しない意味の記述をした人は映像3, 4とも4人のみであった。以上から, 泣いている子どもにはすぐ優先的に対応をするべきとの考えが確認された。

どんな行為で泣き止ませようとするか。言及された行為の内容を表す表現を, ①身体的な接触(抱く, おんぶ, さする, スキンシップ)および身体的接近(側にいる, 行く)②ことばかけ③他の働きかけ行為(遊ばせる, 移動させる, 姿勢を変える等)④玩具などの物を与える, に分類した。一人が複数のカテゴリをあげていることがあるので各カテゴリは互いに独立に実人数(一人が同一カテゴリ内で複数言及しても1回)として扱い, 行為に言及した人数(表1上段)に対する割合を示した。この結果, 一人の泣き場面(映像1と2)での対応行為に言及した人の約80%が身体的接触接近を挙げ, 特に「抱く」(映像1は90.4%, 映像2は52.6%)が多かった。子ども同士の接触場面(映像3と4)では, 「ことばかけ」の人が約70%であった。一方玩具などの物による対応の記述は全体として多くはなかった。

表1 泣いている子どもにどんな行為で泣き止ませようとするか(各カテゴリの人数, 言及総実人数に対する%)

映像(泣き止ませ行為に言及の実人数)		映像1(65人)	映像2(24人)	映像3(44人)	映像4(36人)
泣いている子どもに対して泣き止ませる行為への言及人数	身体的接触・接近	52(80.0)	19(79.2)	21(47.7)	16(44.4)
	ことばかけ	23(35.4)	7(29.2)	30(68.2)	26(72.2)
	他の行為(遊ぶ, 姿勢を変える)	14(21.5)	3(12.5)	20(45.5)	3(8.3)
	物を与える	11(16.9)	6(25.0)	0	3(8.3)
泣いている子どもの情緒・心理への言及人数	落ち着かせる・安心させる	17(26.2)	6(25.0)	3(6.8)	2(5.6)
	感情に共感・言語化	2(3.1)	2(8.3)	27(61.4)	25(69.4)
	気分切り替え	5(7.7)	0	0	0

さらに、泣いている子どもの心理的狀態への対応については、「落ち着かせ」(落ち着かせる、安心させる)、「共感」(気持ちの共感、受け入れ、言語化)、「気分転換」の3種の回答があり、各人数を数えた。一人での泣き場面(映像1, 2)では心理的狀態への言及が少ない中で、相対的には「落ち着かせる」対応が多かった。子ども同士の接触場面(映像3, 4)では感情への共感的な対応に言及した人が多かった。以上、異なった泣き場面ではあっても、泣き止ませる行為は優先的に扱われていること、身体的な対応とことばかけが多く物による対応は少ないこと、身体的な行為では抱く等身体接触で落ち着かせ、ことばでは感情への共感が多いことがうかがわれた。

## 2. インタビューの結果

まず全体として、保育士たちの意見が園を越えて共通性が高かったこと、これまでの調査結果<sup>14)</sup>との整合性が高いことが注目された。他の保育者の意見に異議を挟む発言はあったものの、全く観点の異なる意見はなかった。これには、乳児保育がチームワークであること、実践での経験知、養成・研修の共通性、文化的な共通基盤の影響が推測される。

(1)0歳児が泣くことの意味づけ：0歳後半でも「まだ言葉がない時は生理的な欲求を満たすのを大事にする」のように、泣きはおもに不快や生理的な要求によると解釈されていた。泣くことは「言葉の代わりに行為で成長していく証」「一つの表現の手段なので、不快な気持ちの表現をすることは必要なこと」「一生懸命声を出して、泣いて表現するのはとても大切なこと」のように、言語前の子どもの表現の一形態と考えられていた。また「こうして欲しいという願いの表現」で「コミュニケーションの一つと理解する」ので、泣くのは大事である、ということであった。泣かせるのがよくないのは、「まわりが不安になって泣いたりする時」であり、子ども同士の葛藤で泣かせないのは「危険防止のため」と

いう意見であった。

(2)0歳児の泣きにはどんな感情をもつか：泣きに接した時に保育者が情緒的に揺さぶられる感情がさまざまな表現で語られた。「罪悪感もあるし、本能的に揺さぶられてどうしようもなくなってしまう」「自分が不快だから」「自分が我慢強くないから意志が弱いから」「辛いついていう思いはある」等である。他方、自分を求める泣きには、「かわいいとか、いとおしいっていか、こっちも情緒的になる」という意見があった。保育士には専門職として子どもに情緒的に反応し過ぎない自制が求められるが、そのようななか、強いインパクトをもって情緒に訴えてくる泣き声に対して、保育者は自分の感情の揺れとしてではなく、むしろ子どもの側の情緒的表現として解釈する傾向はないだろうか。

(3)泣いたら泣き止ませるのはなぜか：泣くことを容認しながらも、実践行動では泣いたらすぐ泣き止ませる。ほとんどの保育者がこのことを肯定した。しかしその目的は、泣き止ませること自体ではなく、原因や欲求を理解し受け止めるためだという。「生理的な欲求を赤ちゃんが泣いて出すのは一番私には分かりやすい訳で、それに応える」「泣きたい時には泣いてもいいけど、どうしたんだろうと考える」「こう主張したかったのねって、行動を言語化してあげる」。当然ながら、「自分が不快だから気もそぞろになって」泣き止ませようとすることもある。子どもが泣き続ければ、落ち着かせるために抱く。なかには「抱いて欲しい、側にいて欲しいって伝えてる」ので応じるという発言もあったが、「泣いてどうにも前を向けない状態から、皮膚の触れ合いで安心して、気持ちを切り替えるきっかけになればいい」「抱くことは受け止めで、身体と身体の接触で安心する」と、抱かれた快感で安定し泣き止むという考えが一般的であった。「たいてい抱き上げたら泣き止みますか？」の質問に対して、「よっぽどお腹がすいているか、眠いかなければ、たいてい」の答えに全員が頷いた園があったように、抱くことは確かに効果的

と考えられていた。ただ、少数ながら次のような批判もあった。「泣き始めてぱっと抱き上げると、泣いている理由さえも子どもが忘れてしまう」「抱っこしていれば自分も安心、この子も安心、依存関係になる。その先を見越してちょっと離してあげないと子どもは育たない」。

(4)自分で泣きを解決するのではなく、大人が泣き止ませることについての考え：事例1に見られるように、大人との関係の中で泣き止ませるといふ考えが表明された。「泣き続けさせておくのは子どもにさらに不快な気持ちを与えて、大人への不信感や、どうして受け止めてくれないんだらうってという思いを引き起こさせる」「相手が気持ちを受け止めてくれないと、自分の気持ちも相手の気持ちも分からなくなる」「一生懸命訴えているのに応えてくれないと思うと、子どもたちは不安になる」という。映像3のように、トラブルの原因を除くことで、子どもの自力解決を図る援助については、「自分で立ち直せるような言葉かけを私はしていない」との発言があった。

#### 事例1

保育者「(フランスの実践は)おしゃぶりを使うことで気持ちを静めるっていう作用ですよ。だからそれで泣き止む程度のもはそれで収めると思うんです」。調査者「抱っこも同じ作用ですか？抱っこされると泣き止む」。保育者「ただ、抱っこは人間関係の中で、積み重なって、いろいろな感情がその中で育つ。でも、おしゃぶりは人から慰めて貰うのではなく自分で静める。私たちは自分で収めるといふ感覚よりは、人との相互作用の中で気持ちを収めたいというのが狙いとしてある」。

『「今の泣きなら泣かせておこう」ということはありますか?』の質問に対して、「月齢が高い子が我儘で泣く時はそういうこともある。でも0歳はまだそういう時期でない」と年齢との関係、また「その子が泣いていると、楽しかった子まで泣くこともある。それを思うと難しい」といふ保育環境との関係で泣かせないという意見があった。一方で、「(少しおいて)自律をさ

せる方が子どもは這い上がるし強くしっかり育つと思う。ただ現状では、あまりにも子どもの思いやりズムが無視されているので、せめて嫌な時には泣いて自己を出せるという安心感をもてるようにしたい」との意見が一人からあった。(5)保育士の対応の結果、子どもは大人との間に信頼関係を持つという考え：泣き止ませた結果子どもは不安定や不快が解消され安定した、と答えた人は数人であった。ほとんどの人が、それに留まらず、保育者との信頼関係が築かれるという意見をもっていた。「信頼関係を築くのに一番キーポイントなのは、不快な気持ちから快い気持ちに変わっていく瞬間を受け止められた時で、あ、繋がった、受け止めてあげたって。その積み重ねで、自分を分かってくれるようになっていく」「まず抱っこして話しかけながら、安心感と信頼関係をもって、泣きの理由を共感して受け入れる」「子どもが生理的な欲求を出したら、そこに行って快い状況を作ることで子どもは安定し、その安定をさせてくれた人と関係をもてる。そういうやりとりが0歳児ではある」。したがって、泣きにうまく対応できない時は、「側にいて欲しかったんだね、ごめんね」「この子のことを私は分かってあげられてないんだ。特にまだ関係ができてなくて、その泣きは何か分からない時は、私はダメなのかっていう思いになる」という。これらの意見は、不快を取り除き要求を叶えてくれた人、すなわち子どもが目的を遂げる手段としての役割を果たした相手に対して信頼の情をもつという考えであろう。したがって、要求はできる限り叶えてあげる。現実には、日常のルーティンがそれをしばしば許さないが、「要求は極力叶えてあげたいと思う。できない時は、ちょっと待ってねと」。では、子どもの要求をあえて受け入れないという選択はないのか。「わかったけれど、ダメなものはダメなのよって言い聞かせる場合もある」という意見も一人あったものの、事例2のようなやりとりがあった。

**事例 2**

調査者「要求の泣きなら、『要求してることは分かった。でも私たちは今叶えてあげないわよ』っていう対応もあり得ますね。でもさっきの話からは、先生たちはなさらない？ できるだけすべて受け止めてあげようとなさる？」。保育者1「できないことはできないって、伝えますね」。保育者2「できない時は仕方がないんだけど、できる時には・」。調査者「できる時でもこれは甘え泣きだから放っておきましょうっていう対応はありますか？」。保育者3「こういう時には全部受け入れてあげる保育者なのに、こういう時にはダメよっていうのは、子どもに申し訳ないことをしているかもしれない。でもやっぱり集団の中だと難しいなあって思いますね」。保育者4「要するに、意図的に放っておけるかってことですよ。言葉は悪いんですけど」。調査者「できるだけ私はあなたの要求を叶えてあげようという関係を作っておられるということ？」保育者3「0歳、1歳はそうですね。全面的に。でも難しいな」。

乳児が保育者に泣いて訴えるのは、信頼関係があるからか。「後追いすること自体が愛着関係の完成段階だから。自分との関係ができたからこそ、泣いてもいいって（子どもは思う）」という、信頼関係ができているからという意見があった。逆に信頼関係がまだ十分でないからという意見もあった。「泣いて甘えるのは、その大人のことを信頼しているのだろうけど、まだその信頼は確実となっていないのかな。もっと信頼関係ができれば、先生の姿を目で追って、行っちゃったけど戻って来てくれるから大丈夫と思うんじゃないか」。このように、泣きと信頼の関係の意味は保育者の間でも共有されている訳ではない。ただ信頼関係の相手は一人ではなく、保育者たちのチームであると考えている。この考えは、臨機応変に子どもをフォローしあって保育し、できるだけ早く泣きに対応する体制を保育者間で作る基盤になっていると考えられる。

(6)泣きによらない信頼関係と比べると：泣きの場面以外で信頼関係を築くのはどんな時かとい

う質問を行った。その時、すべてのインタビューで十数秒の沈黙の時間があった。しばしの内省が必要だったのかもしれない。答えは遊びや食事、おむつ替え等の場面での共感関係で、目を合わせる、表情や声で共感するといった場面であるが、それはおもに1～2歳児との関係のとり方であるということだった。「1歳児、2歳児クラスでは、(子どもが)いい姿を出した時に、私たちは『そこがいいよ』っていう、快い対応をする。でも0歳ではそうではない。「体をゆすったりした時には、『嬉しいの』と言って。『そうだね』みたいに抱っこして。そういう感じで気持ちを通わせる」。穏やかな共感関係に重心を置くのは1歳以降に譲り、0歳児クラスでは、強いインパクトをもって対応を迫られる泣きを介した関係に注意が向きやすいのだろうか。

(7)保育者の考えはどこで学んだのか：泣きについての、この共通した考えを保育士たちはどこで学んだのか。それは保育者養成課程でも、保育所保育指針でも、外部研修でもないという。「やっぱり先輩や園長だったり」「職員会議、クラス会議、職場研修だったり、たわいのない話の中で子どもの様子を話したり」と、毎日の実践の中で身につけたという。

(8)保育者は泣きへの対応を通じて子どもに何を伝えているか：以上のような保育者の考えの特徴は、例えば、バルセロナのある保育所の保育者の次の言葉と比べると、一層顕著になる。「(0歳児が泣いた時には)自分で解決できるように少し時間を置いて見守る。それは子どもたちに自由の可能性を与え、自分の意志で動いたり決定できるようにするためである。介入が必要な時は声の響きと表情で提案する。我々の介入はいつでも、子どもたちにとってモデルなのである」<sup>15)</sup>。これに対して、日本の保育者から0歳児に伝えられることは、泣くことで解決を大人に任せられること、自分が大人に守られていること、保育者たちは信頼して頼れる存在であること、他者との関係で自分があること、等ではないだろうか。このような保育者の考えは何に由

来するのか、どのような条件の中で作られてきたのか、ということについて次に考察を行う。

#### IV. 考 察

本研究の結果、0歳児保育では「子どもが泣くのは悪くない」(1)<sup>注2)</sup>が、実際は保育者が迅速に抱きやことばで対応し(3)、大人が安心と共感を与える(4)と考えていることが明らかになった。これを支える根拠は、「泣きへの対応によって保育者と子どもとの信頼関係が築かれる」という理論であり、保育者間で共有されている(5)ことが確認された。つまり、この考えは泣きをめぐる乳児保育実践の根幹として保育者間に浸透していると考えられる。

では、「泣きへの対応で信頼関係をつくる」というこの理論は、どのように作られ共有されてきたのだろうか。

ボウルビイ<sup>16)</sup>やエインズワース<sup>17)</sup>の愛着研究で、乳児の泣きは、微笑や喃語のように好まれる信号行動としてではなく、歓迎されず、止められ、発生可能性を低めようとする行動として論じられている。泣きは子どもと大人の信頼関係を作る要因として重視されてはいない。我々のインタビューで「泣きによらない信頼関係を構築する場面は何か」(6)を尋ねた際、ほとんどの保育者が一瞬思いつけなかったこととは対照的である。しかもボウルビイは、泣き止ませる手段として、「人の声」「おしゃぶり」「揺り籠等で揺り動かすこと」を同列にあげており、特に人による泣き止ませ行為だけに注目しているわけではない。一方本研究では、「自分で解決するのでなく、大人が泣き止ませる」(4)を信頼関係構築の要とする傾向が顕著であった。つまり、泣きと信頼関係を結びつける保育者の考えは、ボウルビイ等の愛着研究を直接の典拠にはしていないと考えられる。もちろん一連の愛着研究は乳児保育理論に影響を与えてきた<sup>注3)</sup>が、たとえ愛着研究を下地にしても、上記のバルセロナの保育者のように、子どもの自由の可能性や意思を尊重するという理由で「時間を置いて見守

り」(8)、子どもとの信頼関係を構築することも可能であるのに、なぜ日本の保育者たちは「人を介した迅速な泣き対応」を重視するのか。そこには愛着理論の独自の解釈が日本の保育者の間で形成され、受け継がれて来たことがあるのではないか。以下、日本の乳児保育実践史から理論生成の背景を考えてみたい。

1947年の児童福祉法成立は、すべての子どもの権利として家庭外の乳児保育に法的根拠を与えた。にもかかわらず、1948年に厚生省の保育課長が「乳児は家庭にあるよりも施設にある方が発育が遅れる」<sup>18)</sup>と述べる程に、戦後の日本社会では乳児は家庭で育てるべきという考えが支配的で、乳児の保育所利用は長らく制限されてきた。とりわけ1963年の「保育七原則」に表れた〈家庭保育原則〉(「2～3歳以下の乳幼児においては、まず家庭において保育されることが原則でなければならない」)<sup>19)</sup>は、乳児保育を抑制する政策を正当化する論拠として受容されてきた。これは、ボウルビイの愛着理論の中で特にホスピタリズム研究をベースにした母子関係論が、保育所入所措置基準の縮小化傾向の一翼を担ってきたことを表している。母子関係論の保育所への日本的受容の特徴は、家庭育児と集団保育を二者択一に捉えさせ、集団保育を「親と保育者の共同の子育ての場」ではなく、「親の育児放棄」とみなす考え方の理論的根拠とされたことにある<sup>19)</sup>。

「0歳児は集団保育に適さない」という乳児保育批判に対する説得的な反論は、結局、「集団保育で0歳児はよりよく発達する」ことを保育実践で証明するより他なかった<sup>20)</sup>。こうして乳児保育の保育者は、質の高い保育を目指して努力しつつ、労働条件は改善されないまま時間や資源を投じる献身的な保育をすることが常態化した。子どもの要求に応答するという子ども中心の育児方法が提唱されれば、してあげたいことも人手不足でできない思いを抱えながら、子どもの育ちのため努力するのが保育者の姿だったといえる。「本当は家庭で育つべき」という世論



## 保育士はゼロ歳児の〈泣き〉をどうみているか

に晒されながら、「保育所でこそ立派に育つ」という実績を重ねる努力が、献身的応答で家庭以上に子どもの意に添い情緒に共感する保育実践に向ったのは当然であろう。「特定の大人との応答的な関わりにより、情緒的な絆が深まる」ことが乳児保育理論の中核の一つになるなか<sup>注4)</sup>、泣きへの迅速で共感的な対応は重要な位置を与えられた。保育者にとって、子どもを泣き止ませる場面は自分の実践の成果の確認ができ、自信をもつ経験であろう。泣きの原因や理由は子どもの個性や発達段階の理解という専門性により解釈され、泣きへの対応は保育技術としても伝達されてきたと言えよう。こうして、「子どもは泣きの理由や感情を正しく代弁してくれた保育者を信頼し、両者の間に信頼関係が確立される」という考えは、0歳児保育の理論的枠組の中で大きな力をもった。

しかし他方で、このような状況は、泣きのもつさまざまな意味に目を向けにくくしており、保育の多様な視点を生み出しにくくしてきたことはないだろうか。例えば、元々泣いていた理由と保育者の解釈との間にズレがあった場合（例えば「おむつ替えは嫌だ」と泣いても「おむつが濡れて気持ち悪いのね」と大人に解釈されおむつを替えられる場合）、子どもの当初の思いは受容されたのではなく諦めさせられたことになる。また、保育者に泣き止ませてもらうことで、保育者への依存は高まり、子ども自らの能動性はある意味制御されたとも考えられる。保育者が「子どもの気持を代弁して信頼関係を築く」という時、無意識のうちにであれ、保育者にすべて把握される扱い易い存在としての子どもが想定されてはいないだろうか。

泣きを子ども、保育者、発達段階、保育環境等異なる観点からみると、解釈も対応も異なることは十分考えられる。保育者自身が複合的な観点をもっていれば、チーム内での保育者たちの考えに一定程度の違いがあってもよいし、その違いに出会うことで新しい実践を発見し、保育を充実させることに繋がるであろう<sup>注5)</sup>。たとえ

ば、乳児保育を保育者と子どもの間、子ども間、保育者間のダイナミックな関係性の場として捉える見方や、子どもを主体性をもった存在として捉える見方等、より多様な見方の可能性を乳児保育の中に導入すること、またそれが可能になるような保育環境、保育士の労働条件や研修を検討することは今後の課題であろう。

## 注

(注1) フォーカス・グループ・インタビューの定義は、ベック等によれば「具体的な状況に即したある特定のトピックについて選ばれた複数の個人によって行われる形式ばらない議論」である。特徴は特定の話題について、司会者がある程度の質問を準備し、討論集団の形で、参加者の理解、感情、受け止め方、考えを引き出して質的情報を得ることにあり、リラックスした雰囲気の中で参加者は自由に考えを交換する。通常6人から12人の比較的等質的な集団が最適である。(ヴォーン, S.・シューム, J.・シナグブ, J. 井下理他訳 (1999) グループ・インタビューの技法, 慶應義塾大学出版会, 215)

(注2) インタビューの結果(1)を参照のこと。以下( )の数字はインタビュー結果。

(注3) たとえば、「一者の情動状態の崩れを二者の関係性によって制御するシステム」を愛着と呼び、愛着の対象を「危機が生じた際に逃げ込み保護を求める“確実な避難所”」かつ「そこを拠点に外界に積極的に出ていくための“安全基地”」だとする議論(数井みゆき・遠藤利彦編著(2007)アタッチメントと臨床領域. ミネルヴァ書房, 4-5)や、窮迫な状況を解除し、その快感によって子どもの特定の愛着対象への信頼関係が築かれるとする議論(陳省仁(1986)新生児・乳児の「泣き」について. 北海道大学教育学部紀要48, 190)等は、母子関係論領域のみならず保育所の乳児保育理論にも影響を与えてきたと考えられる。しかし、これらの研究を直接参照せずに構築されてき

た乳児保育理論が、実践の多くを規定していることもまた事実ではないだろうか。

- (注4) 保育所保育指針は1965年策定当初から、6か月未満児の保育の内容で、「身近にいる特定の保育士が適切かつ積極的に働きかけることにより、子どもと保育士との間に情緒的な絆が形成される。これは対人関係の第一歩であり、自分を受け入れ、人を愛し、信頼する力へと発展」するとしている。数度の改訂を経ても一貫して乳児保育の中の柱は子どもへの共感的な対応によって築かれる「情緒的な絆」である。(厚生労働省告示第141号「保育所保育指針」(2008.3.28), 2の発達段階(1)おむね6か月未満)
- (注5) これは、本研究が実践研究として保育者間の議論の方法をとった目的の一つでもあり、実際この後保育所内で議論を進展させて保育改善を行った園もあった。

## 引用文献

- (1)厚生省および厚生労働省による社会福祉施設調査報告の各年次参照
- (2)赤ちゃん保育研究会編(2007) 乳児保育と赤ちゃん学 No. 2. フレーベル館. 79
- (3)陳省仁(1986) 新生児・乳児の「泣き」について: 初期の母子相互交渉及び情動発達における泣きの意味. 北海道大学教育学部紀要48巻. 187-206
- (4)東京都公立保育園研究会(1997) 0歳児保育の実際. 東京都公立保育園研究会. 231
- (5)根ヶ山光一・星三和子・土谷みち子・松永静子(2006) 保育園0歳児クラスにおける乳児の泣き—保育士による観察記録を手がかりに—. 保育学研究43巻2号. 65-72
- (6)星三和子・志村洋子・汐見稔幸・高橋洋代・保坂佳一・塩崎美穂・松永静子(2004) 赤ちゃんの泣きと保育環境・方法に関する研究(1). 日本保育学会第57回大会発表論文集. 264-265
- (7)星三和子(2005) 乳児の泣きへの保育者の対応を通してみる子ども観の日仏比較. 日仏教育学会年報11号. 159-169
- (8)前掲(5)
- (9)伊藤輝子・天野珠路編(2007) やさしい乳児保育. 青踏社. 39
- (10)穴戸健夫監修(2004) テキスト乳児保育. 大阪保育研究所編集. フォーラム・A.81, 165
- (11)穴戸健夫・土方弘子・神田英男編(2006) 乳児の保育を豊かに. ルック25. 204
- (12)Tobin, J., Wu, D. Y. H., & Davidson, D. H. (1989) *Preschool in Three Cultures*. Yale University Press. 238. Tobin, J., Wu, D. Y. H. (2007) The poetics and pleasures of video ethnography of education, in R. Goldman (ed.). *Video Research in the Learning Sciences*. 7-92. Lawrence Erlbaum Associates.
- (13)Baudelot, O, Rayna, S., Hoshi-Watanabe, M., Takahashi, H. (2005), *L'arrivée des bébés le matin à la crèche : une comparaison des pratiques d'accueil*. In Rayna, S. & Brougère, G. (eds) *Les relations parents-professionnels de la petite enfance*, Paris, 151-186. INRP.
- (14)前掲(6)
- (15)Ferreri Braut, R. (2007) Une "école" en construction pour des enfants de 0-3 ans. *Le Furet*, 53, 2-4.
- (16)Bowlby, J. (1969) *Attachment and Loss: Vol. 2; Attachment*. Basic Books. 黒田実郎他訳(1976) 母子関係の理論II; 愛着行動. 岩崎学術出版社. 479
- (17)Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Water, E., & Wall, S. (1978) *Patterns of Attachment; A psychological study of the strange situation*. Lawrence Erlbaum Associates 416.
- (18)鈴木佐喜子(1987) 母子関係論と乳児の集団保育. 青木一他編. 保育幼児教育体系保育の思想. 労働旬報社. 326-344
- (19)同上
- (20)橋本宏子(2006) 戦後保育所づくり運動史. ひとなる書房. 327

## 謝辞

本研究にご協力くださいました保育所の保育士の先生方，園長先生に心より感謝致します。立教女学院短期大学名誉教授高橋洋代氏，洗足学園短期大学柳井郁子氏は本調査の一部に参加され，また貴重なご意見を頂きました。御礼を申し上げます。本研究に多くの助言を頂いた乳児保育研究会の皆様にも深く感謝致します。

行政法人福祉医療機構「子育て支援基金助成金特別分助成」の交付を受けて行われた，「乳児の『泣き』を手がかりにした乳児保育および育児における環境の影響に関する調査事業」(代表者汐見稔幸，乳児保育研究会)の一部である。

本論文は，その一部を，日本保育学会第59回大会(2006)，および日本保育学会第60回大会(2007)にて発表した。

## 付記

本研究は，2003年度および2004年度に，独立